

琥珀のひとみ



琥珀のひとみ *Eyes of Amber* (1976) ジョーン・D・ヴィンジ (浅羽英子・岡部宏之訳) 東京創元社(文庫) (9/30刊・¥480)

これが、代表的なアメリカ現代SFの一断面をあらわしているという意味では、確かに納得できる作品集ではある。ヒューゴー賞受賞の表題作「琥珀のひとみ」は、タイタンに棲む異星の女性と、交信装置(琥珀の瞳を持つ「魔物」)を介した地球人との触れ合いを描いている。しかし、この作品は、いよいよ物語がはじまる瞬間でとどめられていて、より以上に発展はしない。旧来からのアメリカSFなら、一方的な倫理観の押し付けで終ったろう。もっとヒネくれた作品なら、エイリアンの異質さを強調して終ったかも知れない。つまり、従来からの定石を、読者の反発を誘わない範囲で外した、とでもいえるのだ。もちろん、ヴィンジの良さは、そんな消極的な部分にだけとどまるわけではなく、色彩の豊かな描写力にもあるのだけにとどまる。

本書に収められた作品の多くは、同様の構造を大なり小なり持っている。喰い足りなさは、言いかえれば特有の「軽さ」でもある。バランスさえ整っていれば、必ずしも悪いとはいえない。「水晶の船」のイメージと、「錫の兵隊」のシンプルなメロドラマの味がまずまず。